会員寄稿　随想

若い頃の時間を…

育友会父母幹事　小池文美

大学生の人生と同じぐらいの時間を社会人として過ごしている。社会人になり母親になり何よりも自分の時間がなかった。私が若い頃は、海外に興味がありアルバイトをしてお金を貯めては色々な国を訪れていた。ところが、子供が産まれると同時に生活は一転、朝ごはんを食べさせ、子供の身支度をして保育園へ送り（そこで涙の別れがあり）、職場にダッシュで向かって（仕事の都合上帰宅が遅かったので、子供の保育園の迎え、夕飯、お風呂は、母親にお願いし）私が家路に着く頃には子供はスヤスヤ夢の中だった。子供の寝顔を少し見て、洗濯、次の日の準備、そしてまた朝が来るという生活の繰り返しだった。子供が小学生になると習い事の送迎、中学生になると部活の弁当作りが加わり、高校生になると弁当作りが毎日の日課となった。本当に目まぐるしい日々で、周りの人からは「大変ね〜」と言われたりもしたが、所詮、他の家庭と比べることはできないから、これが私のルーティーンだったし、そのことについて深く考える余裕もなかった。

子供との20年を振り返ると、家庭と職場の往復で“母親として十分な時間を作ってあげられなかったな”っと、どこか後ろめたさもあるけれど子供達には楽しい時間と沢山の笑顔をもらったなと感じている。独身の頃はお金がなくても、自由な時間があって自分の好きなことをしていられた。しかし、子供を持つといつの間にか自分の手帳は子供の行事で埋め尽くされていく。それでも、子供達と過ごした年中行事や少しずつ成長していくわが子と時間を共有することは、何にも代えられない貴重な体験だった。そして、子供達の存在がなければ育児も仕事もここまで頑張って来られなかったと思う。

傍から見た私の生活は、自由がなく面白みのないものだったかもしれない。ただ、若い頃バックパックを背負って世界を駆け巡った経験があったからこそ、今の不自由な人生もそれなりに楽しめるのかと思う。ヨーロッパ・アジア・オセアニア・北アメリカと本当に沢山の国に行き、現地で自分が食べられ、次の目的地に移動できるだけの小遣い稼ぎをして暮らしていた。初めの頃は、初めての国、初めて会う人々に不安を抱きながら行動していたが、世の中どこへ行っても助けてくれる人がいる。それと同時に自分で計画を立て情報収集しながら行動することによって、危険を察知する能力が高まる。だから、海外で怖い思いをしたこともないし、様々なバックグラウンドを持った人々から価値観を学ぶことができた。

現在、電機メーカーに勤め20年弱になりいつの間にか職場の新人が自分の息子のような歳になってきた。業務上、英語が必要となる部署なのだが、初めて英語に触れる人が多い（多分、これは最近の若い子がというのではなく職業柄なのだと思う）。そんな、職場において若い人が一様にして口にしているのは「学生のうちに海外経験を積むべきでした」ということ。ビジネスで使う英語は、数を熟していくと書けるようにはなっていく。ただ、海外取引となると海外出

⬇イタリア コロッセオ

⬆ギリシャ イドラ島

⬇スペイン モンセラット

⬆ドイツ ケルン大聖堂

張の場でその国の人とランチをしたり、会食をしたり仕事以外の会話が必要になってくる。そんな時、日頃どれだけその国に関心を寄せているか、世界の動向をどれだけ気にしているかで会話の弾み具合が異なる。また、コミュニケーションが取れるかどうかは、信頼関係の構築面では大きい。どんなに優秀なエンジニアでも相手とコミュニケーションが取れないと信頼関係は築けない。そして、どんなに良い物を作ってもコミュニケーション能力がないと海外販売はできない。グローバル化が確立された現在、どうしても日本だけに留まるわけにはいかない。時間がある学生時代に是非とも海外経験を積んで欲しいと思う。